俳句

8月8日（土）
当季雑詠

吉本　伸秋

滴りを刻みて光る岩煙草
草の露あやしあぐねて零しけり
小笠原さちを

誰が咎ぞ七十年の原爆忌
雲の峰一つ崩れて秋の立つ

9月19日（土）
南国市国分
紀氏邸跡　国分寺

吉本　伸秋

ひそやかに枸杞（くこ）の実灯る野の仏
風さそひ風にたはむれ式部の実
小笠原さちを

大まかに一括りされ女郎花
丹念に銭苔手入れ寺の秋

短歌

一杯の冷茶

山本晶子

豆のような小さき消しゴムいとしみて使いおりたり日（ひ）になんべんも
一杯の冷茶ごくごく飲み干して「助かりました」と屋根工事人
眠れぬを恐れ眠剤のむ習いときどき休めと医師は言いたり

つひに来ぬ

榊原忠彦

毎週の「歴史捜」は楽します運ぶは二枚目愛之助なれば
（BSテレビでの俳優・片岡愛之助による「歴史捜査」なる番組）
赤岡ゆ「白菊」抱き訪ねられ「漱石論」弾む酔ひ深みつつ
（わが城山高時代以来の親友、九月死亡の沢英彦君と）
つひに来ぬ自転車に乗れぬ怪我の日が鎖骨骨折で読み書き苦し

非戦

叶岡淑子

非戦ほど強きものなしこの国のこの七十年をふりかえる秋
違憲なる安保法制廃止へと老いも若きも手をつなぐ秋
人類の知性は平和を守り抜く未来社会を信じ生きたし

初月農園だより
恋の香り

島本　聡

恋の香り、いばらキッス、濃姫などの名に惹かれたわけではないが、いちごの栽培を続けている。

10月、1株150円～350円もするポット苗を40株ほど、手にれる。家庭園芸に適していると思われる、宝庫早生や、とよのか、女峰など手当たり次第に植えてみる。かまぼこ状の高い畝をつくり、石灰、化成肥料、鶏糞をいれ、冬の寒さ到来までに根を張らせておく。寒さには強く、葉が茶色に枯れても大丈夫、春になると生き生きと葉が成長してくる。このとき藁や、ビニールでマルチをしてやる。3月から4月にかけて、白い（桃色もある）花が一斉につき、実がつく。一次開花の時期は、まだ受粉を助ける虫が少ないので、人工受粉をしてやる。5月～6月に、1株につき10数個の青白い実が見る見るうちに大きな真っ赤な実に成長する。・・・はずである。10年以上も続けているが理想の実を収穫したことがない。失敗の要因をあげてみる。まず土の作りかた。窒素肥料は控えるべし（鶏糞）窒素成分がおおいと、大きな立派な葉に成長するが、花がつかない、いちごは葉を食べるものではない。リン酸成分をおおくすべし。畝は高畝、いちごは水を好むが、水はけのよい状態でないと、根が腐ってしまう。太陽はよく照る場所がよい。

暖かい高知では、1月にも花をつけるが、これを赤い実にするには保温が必要、摘花し春に咲く花を待つべし。4月はじめに咲く花は人工受粉を施さないと実が大きくならない。5月に青白い実がほんのり赤くなりはじめたころ、雨がふると、カタツムリやナメクジが、実の裏に穴をあける。雨除けが必要となる。あと少しで、収穫しようと待っていると、渡りそこねたヒヨドリや、集団で行動するムクドリが、襲ってくる。また頭の黒い鳥やヒトも。対策は、赤くならないうちに食べるべし、十分いちごの香りと甘さをもっている。うどんこ病、炭素病、灰色カビ病またダニ、アリマキなど害虫も多く家庭菜園では、結構難易度が高い。

今年もまた、孫の手をひきながら、前夜、葉の裏に隠しておいた、1パック分の赤い大きな実を探しては収穫の喜びにひたっている。白髪も増え、月日のたつのが速くなってくる。

三十五畳の思いで十四 シーズンⅡ
浄瑠璃寺　秋

松山　和雄

これは仕方のないことだろうが、お寺の寺号（名称）はどうにも堅苦しい。そんな中にあって、この寺の寺号は格別だ。奈良と京都の境の地、当尾（とうのお）の「浄瑠璃寺」、なんと美しい響きだろう。

そんな寺の名前に惹かれて、はじめて訪れたのは教師になったばかりの頃。狭い山道を揺られ、たどり着いた時には足元もふらつき周りの景色が歪んで見えるようだった。とりあえず門前の茶店に入りうどんをお願いしたのだが、何しろ車酔いがひどくどうにも喉に入らない。いく筋かをやっと流し込み、濃い番茶で一息をついたことだった。

当尾（とうのお）の「浄瑠璃寺」

あれから五〇年余、この寺に足を運ぶのは五度目になる。岩船寺から浄瑠璃寺への「石仏の道」をノタリノタリと二時間半ほどかけて歩き、かって茶店があったあたりに来た頃は正午近くになっていた。十一月末の紅葉も盛りの頃ともなれば、茶店あとの駐車場は車がいっぱいで、バス停には行列ができている。それでも通りを少し外れると

「・・・向こうの藁屋根の下からは七面鳥の鳴き声さえのんびりと聞こえてきて・・・まさかこんな田園風景の真っただ中に、その有名な寺が・・・」

と、堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」で描写されたような、ひなびた風景がそこここに見られて嬉しくなる。

小ぶりの山門を抜けて池に添って歩き、東の高台に建つ三重塔の軒下まで上がると、足元には柔らかな紅葉の絨毯が厚く一面に敷き詰められている。見上げれば頭上にはあでやかに色付いたモミジの葉枝が大きな傘となって覆いかぶさり、手のひらを差し出せば一葉二葉と舞って降り積む。朱色の塔と、紅や黄に化粧したモミジの古木、西に眼をやれば阿弥陀堂前の池の水面にも紅葉の絨毯は敷かれている。周りの空気までもが錦秋に染まっているようだ。

阿弥陀堂のある池の対岸は、西方浄土極楽界で隠り世での往生を願っているらしいが、古き人たちが思い描いた現し世の東方浄土浄瑠璃界もいいもんだ。

ここはいい。いつ来ても、幾度来てもここはいい。

次回　奈良　春日若宮

会費納入のお願い

会費の納入がまだの方は、早急にお願いします。